

い場合には雨になることが多い。低気圧が通過してしまうと、西高東低の冬型気圧配置に戻って太平洋側は晴天となるため、日本海側地方のように何日間も雪が降り続くといったことは起こらない。したがって、大雪といっても積雪深1mを越すようなことはない。

ところで、東京では過去において一体どの程度の大雪が降ったことがあるのだろうか。また、最近では暖冬が多い上に都市気候も重なって大雪が降りにくくなっているようだが、そうした影響のなかった江戸時代には果たして大雪が多かったのだろうか。若干の資料をもとに、過去の東京の大雪について述べてみたい。

1876年(明治9年)に東京管区気象台が開設されて以来の最深積雪記録は、1883年2月8日の46cmである。これは気象台の露場における観測値であるから、都内でも場所によってはもっと積もったと思われる。ちなみに、新聞集成明治編年史から2月9日付の東京日々新聞の記事を引用すると、「一昨々六日は昨日春立ちし甲斐ありて、天気いと長閑かに風さへ無くて夜に入っても星の光り限なければ、明日の日和も好るべしと思ひしに似ず、七日の午前二時頃より空の気色忽ち変て四時過より雲の降り出で、五時頃より全くの雪となりぬ。(中略)夜半許には一尺の上に満たるが、此頃より風は増々荒く雪はいよいよ降頻りて、本社の前なる銀座の通も一人一人も往交ふを見ず、(中略)戸外に出れば扱も降積みにけり。軒下の雪除ある所にては三尺に近く満たれば、況て往來の風の吹溜る所にては、五尺より六尺にも及びたらんか」といった具合である。気象台の観測値46cmは一尺四寸に相当するから、文中の三尺に近い積雪というのは明らかに過大な数字といえよう。無論、積雪深には地域差があるから、都内でも場所によっては1m近く積もったのかもしれない。

ところで、東京では一体どのくらい積雪があると大雪と呼ぶのだろうか。5cm程度の積雪でも、交通に混乱を起こすようであれば大雪といえるかもしれない。江戸時代の記録をみると、「江戸大雪、積る事一尺余」といった記述が目につく。単純にメートル法に換算すれば、約30cmということになるが、前述の例のように過大に見積もっているということも考えられる。そこで、仮に積雪深20cm以上を大雪と定義して過去の記録を調べてみると、1876年の観測開始以来これまでに合計で21回の大雪が降ったという結果になる。5年に1回という割合である。これを月別にみると、1月は6回、2月は12回、3月は2回、4月は1回となり、12月に20cm以上の積雪は記録されていない。やはり、東京では2月にもっとも大雪が降りやすいということがわかる。次に、全期間を、1930年を境にして、前半の54年間と後半の54年間に分けて、その出現回数を比較してみると、前半が12回、後半が9回とやや減少の傾向が読みとれる。

そこで、さらに逆のぼって江戸時代の大雪について調べてみた。前にも述べたように、正確な積雪深はわからないが、史料等の記述からある程度の推測は可能である。「日本の気象史料(2)」(原書房)から、一尺以上の積雪記録をとり上げてその出現回数を数えてみよう。1633年以降についてみると、1876年までの243年間における大雪回数は62回に達する。およそ4年に1回の割合である。やはり、小氷期に相当する江戸時代は、現在よりも大雪が降りやすかったのだろうか。それとも、都市気候の影響で東京には大雪が降りにくくなっているのだろうか。あるいは、江戸時代の人々が積雪深を過大に見積もっていたのだろうか。気候変動を考える上での興味ある課題の一つである。

スペインの「地域主義」

栗原 尚子

ちょうど今、スペインの「地域主義」の問題に取り組んでそのまとめに四苦八苦しているところである。低開発諸国の少数民族のナショナリズムに対する関心に触発されて、先進諸国における同様の問題が地理学の分野においても注目されるようになったのは1970年代に入ってからであった。19世紀後半以降の民族国家形成にかかわる諸理論の再検討を基本には含んでいる。

私がこのテーマに関心をもちた背景には、スペインに

おいて体験した各々の地域に対する人々の帰属意識の強さにひかれたことがある。1977年9月、初めてバルセロナの地を踏んだとき、約40年ぶりの自治権回復でバルセロナはわきかえっていた。都心部の高窓建築の窓々からシンボルである赤と黄の縞模様のカタルーニャ旗が掲げられ、新しい政治体制への期待がみなぎっていた。大寺院にはカタラン語によるミサの時間割がはり出されていた。カタルーニャ旗の掲揚も公的場でのカタラン語の使

用もこれまで禁じられていたのである。1979年冬、アンダルシアの地においても同様の体験をした。セビリアではセビリアへの、調査地域であったシュラ・モレナ山中の山村ではその山村への帰属意識を人々は口にした。Regionalismo, Provincialismo, Parochialismo と空間スケールの相違によりいろいろ呼ばれてはいるが、その根底にあるのは、スペイン人の小さな祖国 patria chica に対する帰属意識の伝統的強さであることはしばしば指摘されている。特定の地域に対する帰属意識というのは何もスペイン人へのみかぎられたことではない。おそらく誰でも経験していることであろう。問題は小さな祖国という形容詞「小さな」ということと「国」という認識である。19世紀後半以降中央集権的国家体制の形成期に Regionalismo が昂揚したことが証明するように、Regionalismo はひとつには地方分権的な地域ご

の自治に基づく政治体制樹立の運動としてあらわれている。

スペインの「地域主義」そのものについては、その運動の担い手の社会的性格をはじめ問題がないわけではない。しかし、ユートピア的ではあるが、一つの空間組織のあり方を示すものとして関心と呼ぶ。根底においてアナキズムの影響を強くうけている。Myrna Marguilies Breitbart (Anarchis&Decentralism in Rural Spain, 1936—1939, Antipode Vol 10, No. 3, Vol. 11, No. 1 1979) が明らかにしたようなアナキズムの空間組織原理とどのようにかわるのか興味のあるところである。

また運動が形成されていく過程での集団形成は領域 territory 形成とともに地域形成の問題ともかかわってくる。学際的研究視角が基本であるとはいえ、地理学的な研究テーマの設定を我々としては考える必要があらう。

最近の地震・火山の話題

諏訪 彰

関東大震災60周年の昨1983年は、久しぶりに、全国的に地震・火山活動がかなり活発であった。そのうえ、メキシコのエルチチョン火山の前年3～4月の大爆發で成層圏にまで吹き上げられた火山灰雲(おもにエアロゾル)による世界的な気候異変が懸念されたり、富士山大爆發・東京大地震発生などの非科学的なデマも流布されたりして、誠に騒々しかった。お陰で、私も、実にあわたしく東奔西走させられた。

どこかの気象官署が震度4(落下物等で被害が出やすい)以上になった地震は26回もあった。5月26日の日本海中部地震(M7.7)は死者104人(地震動4人、津波100人)、傷者163人、8月8日の神奈川・山梨県境の地震(M6.0)は死者1人、傷者8人をだし、他の4地震も傷者をだした。全国でも、地震による死者は、1978年の宮城県沖地震(死者28人)以来のことである。3ケタ以上の死者がでたのは1965年のチリ地震津波(死者142人)以来のことであり、更に、日本とその周辺で起きた地震では、1948年の福井地震(死者3,895人)以来、約35年ぶりであった。

また、この年には、諏訪の瀬島・桜島・新潟焼山・草津白根山・浅間山・三宅島の6火山が噴火し、他の6火山も火山性異常現象(地震群発、噴気温・地温上昇、地盤隆起、海水面変色など)が認められ、特に、桜島と三宅島では、惨害を生じた。1955年秋からの桜島南岳の一

連の噴火活動は、1983年にも毎月爆發を反復し、年間413回を算した(累計4,329回)。過去に年間爆發回数が400台になったのは、1960年の414回だけである。10月3～4日におきた、三宅島の21年ぶりの噴火は、島の南西側での割れ目噴火であった。溶岩流出やマグマ水蒸気爆發で、火山噴出物総量は約1,200万 m^3 に達し、ことに溶岩流は住宅約400戸と小・中学校などを襲い、埋没・焼失させた。

三宅島測候所の地震計が噴火前兆の火山性地震を記録し始めたのは、噴火開始前1時間半足らずであったが、大噴火にもかかわらず、死傷者は皆無であった。噴火開始が昼間だったことも幸いであったが、元来、同島民達は火山活動に対する防災意識が強い上に、8月末に総合避難訓練がなされた直後だったのである。さすがは活火山島民で、危急の場合にも互助連帯の精神を貫き、防災の実をあげたのであった。

12月下旬、その三宅島が、突然わき上がった米空母艦載機の夜間発着訓練基地受け入れ問題で大騒ぎになった。噴火災害からの復興を急ぎ、離島の過疎化食い止めをはかろうとする村議会が、基地受け入れを含みとした、大型ジェット機が離着陸できる官民共同の新空港の建設を国に求める意見書を、隠密的に多数決で採決し、政府や東京都へ急ぎょ陳情した。それを後で知った一般島民達が、村議会の独走に猛反発したのである。